

国際開発学会第16回春季大会(2015)企画セッション

「経済発展のメカニズムと政策・支援：
石川滋先生の貢献と現代」

初学者ゆえの気づきに特化して

小林誉明
横浜国立大学

2015年06月07日(日)
於法政大学市ヶ谷キャンパス

I 石川「学問体系」のすごさ

報告者より

<開発研究>

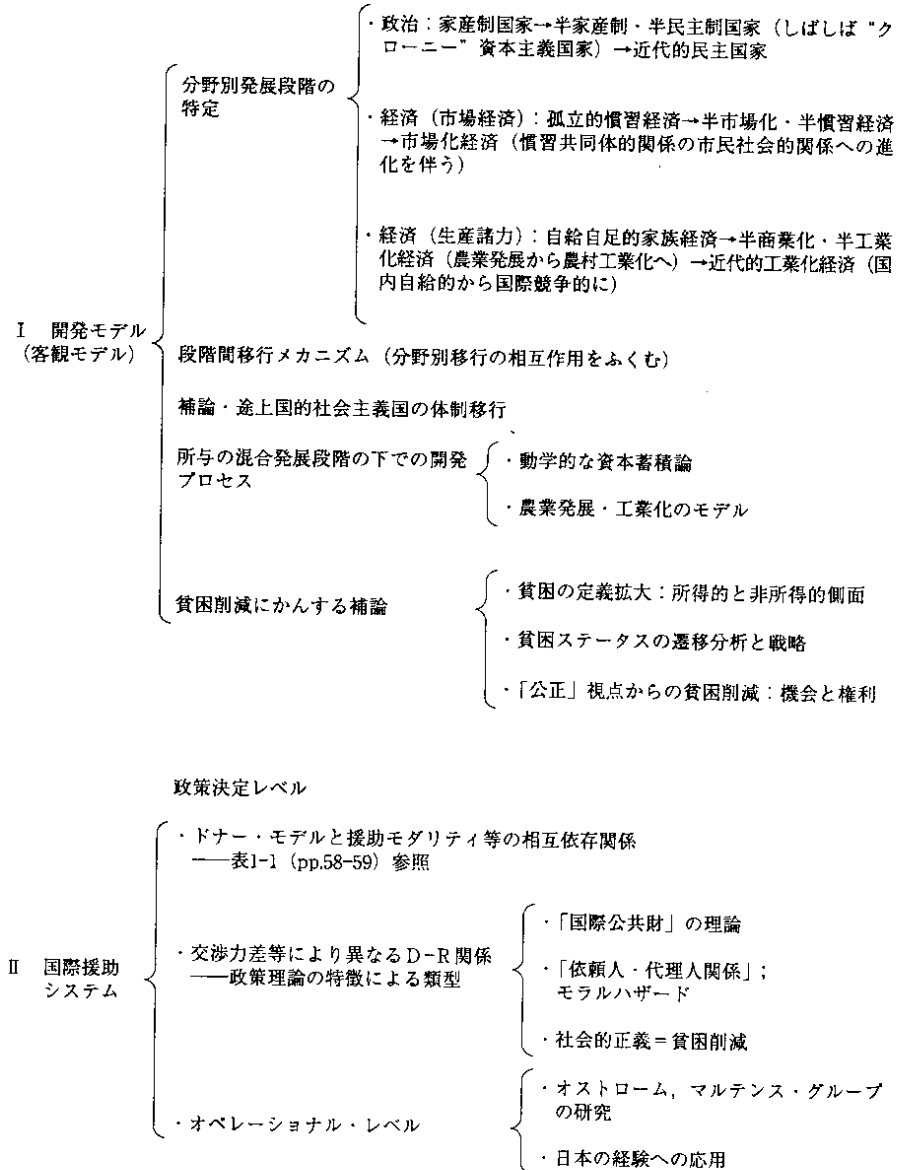
- 現代の途上国につき、開発イシューの適切な把握を踏まえて独自の問題設定を行い、探求したこと(柳原報告)
- 経済開発を(非市場も含む)歴史的過程と捉えた(高橋報告)
- 長期開発の視点(大野報告)
- 実態経済への関心(大野報告)

＜開発研究と援助研究の接点領域＞

- ドナー国の援助の性格を規定する要因を対象国に求めた（高橋報告）
- 経済開発は政治的独立を裏打ちするための経済的独立・自立を達成すること（柳原報告、下村報告）
- 政策の領域に継続的に取り組んだ（下村報告）

国際開発政策論 の基本枠組

表 1-2 国際開発政策論の基本枠組み：略図



(注) Dはドナー，Rはレシピエントを表す。

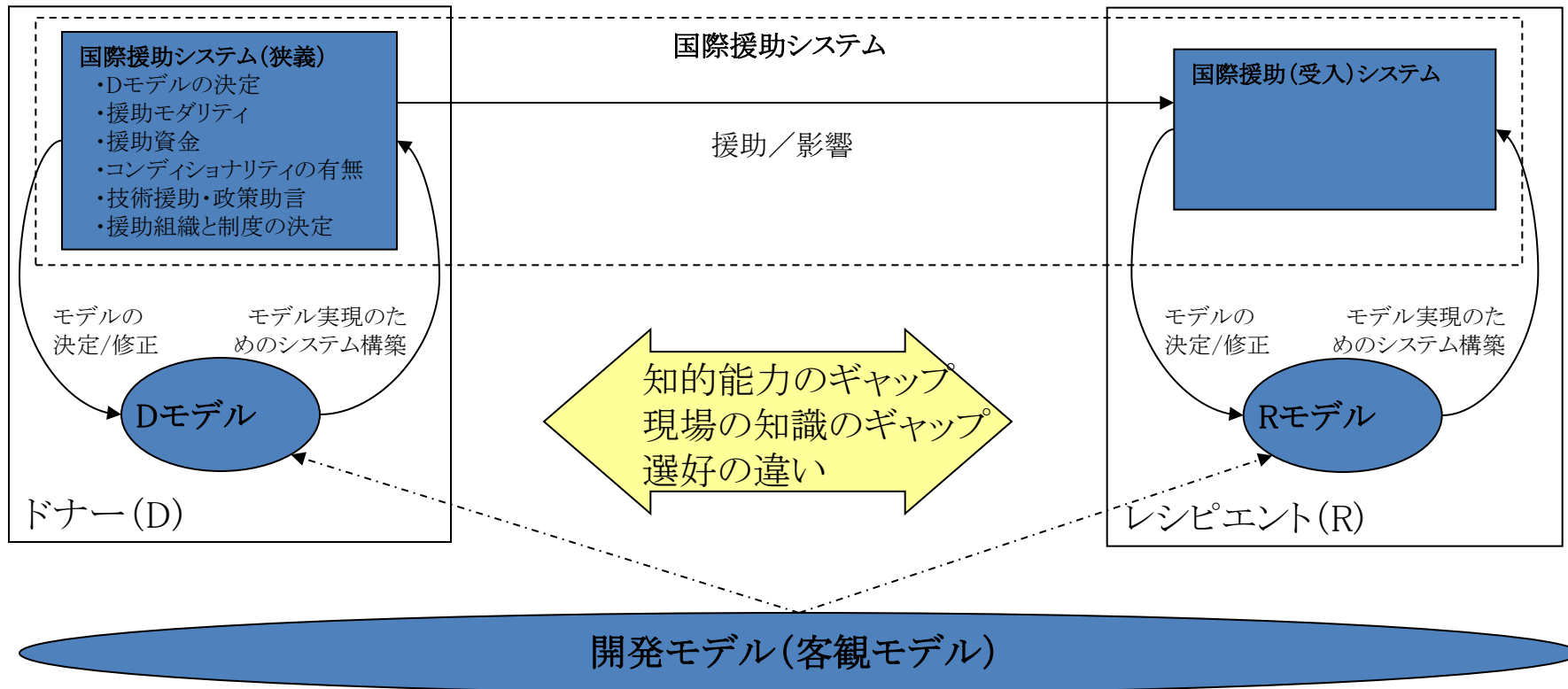
◎学問の海原で迷子にならないための 大きな「見取り図」を示してくれたこと

「基本枠組」ということの意味と重み

- 「開発」研究と独立した援助・協力の独自の学問の可能性を示した上で、その相互関連性を提示
 - 援助がうまくいかない/いく根本的原因を提示
 - 援助システムの議論だけをするものの不毛さを知る
 - 開発モデルの違いから摩擦、非効率性が生まれるので、援助を成功させるには、援助する側とされる側との開発モデルを整合させる必要がある
- 「基本」ゆえにあらゆる学問に対してオープンであり、接続可能性あり
- 最新の議論(PAなど)の取り込み
- 「応用」の可能性(例:新興ドナー論)

「基本枠組」の理解

- 開発モデルと国際援助システムを包括して分析する枠組
 - 開発モデル: 途上国はどのように開発するか
 - 国際援助システム: 途上国の開発をどのように援助するか



各報告における「基本枠組」の位置づけ

- 「基本モデル」を内包するものとしての基本枠組（柳原報告）
- 日本型もしくはアジアのモデルを意識した基本枠組（下村報告、高橋報告）
 - 援助の基本的なモデルを示しているのではないか
- 知的支援のモデルとしての基本枠組（大野報告）
 - 「あらゆる援助は知的支援である」という含意
- 「実態」枠組なのか、「学問」枠組なのか？
 - 混在している。実態を踏まえた学問枠組と考えられる

◎一貫した研究姿勢を示し 続けてくれたこと

- 実践に裏付けられた研究

- 研究成果に基づく実践

- 石川プロジェクトにおける6年強の労力

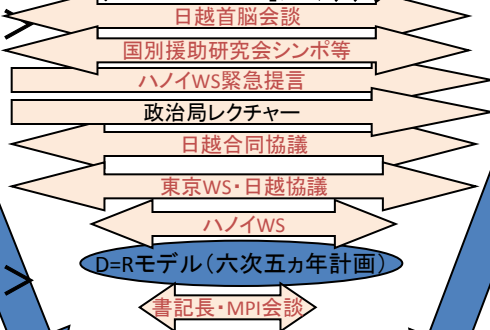
石川Pにおける開発モデル収斂の過程

1995

＜第1フェーズ＞

D

R



『日本の一部の意見には、**ベトナム国の現状を反映していないものもある**』（越高官）

1996

＜第2フェーズ＞

DC

AFTA加盟

第8回共産党大会

■『越の実情をよく理解して頂き、非常に実践的なものになっている』（越高官）

1997

世銀エコノミストよりレター



アジア危機

1998

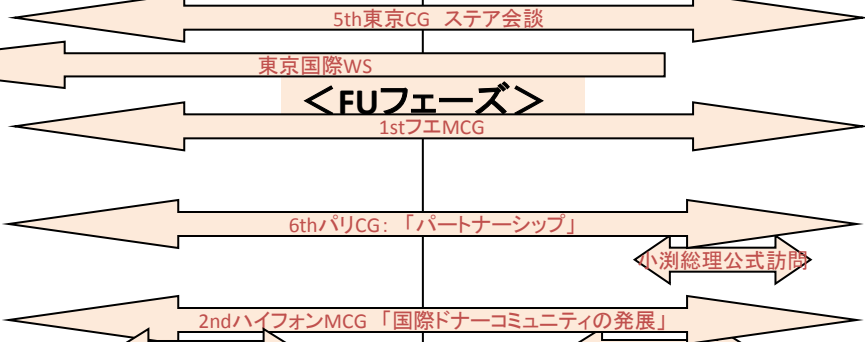
MPIスタッフセミナー

＜FUフェーズ＞

『IMF・世銀の要求は欧米モデルを前提としていて、そのままでは越社会の現実との間にギャップがある』（越高官）

1999

CDF提唱(世銀・IMF総会)



＜第3フェーズ＞

2000

PRSP体制開始(世銀・IMF総会)



“パートナーシップはベトナムにとってオーナーシップです”
（フック大臣）¹⁰

2001

D=Rモデル
7次5カ年計画/10カ年戦略

第9回共産党大会

DC=D=Rモデル(ドラフトCPRGS)

Ⅱ. 残された課題

実践課題

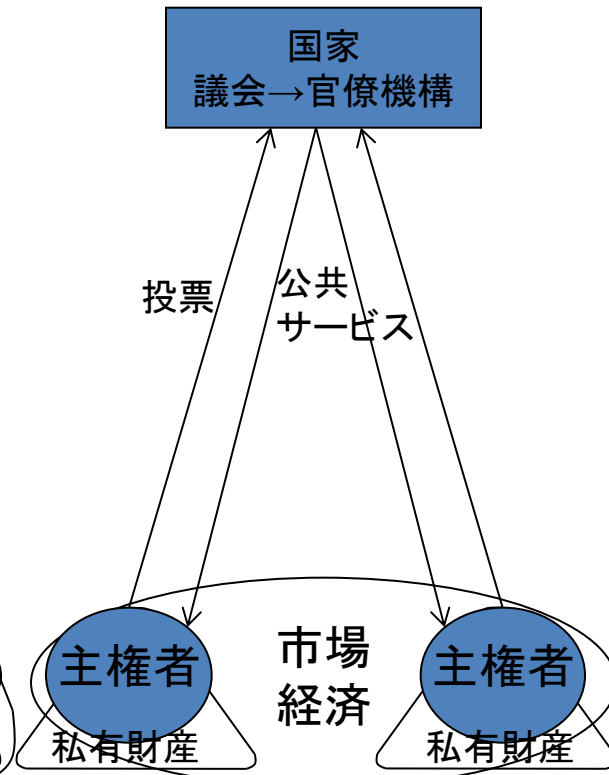
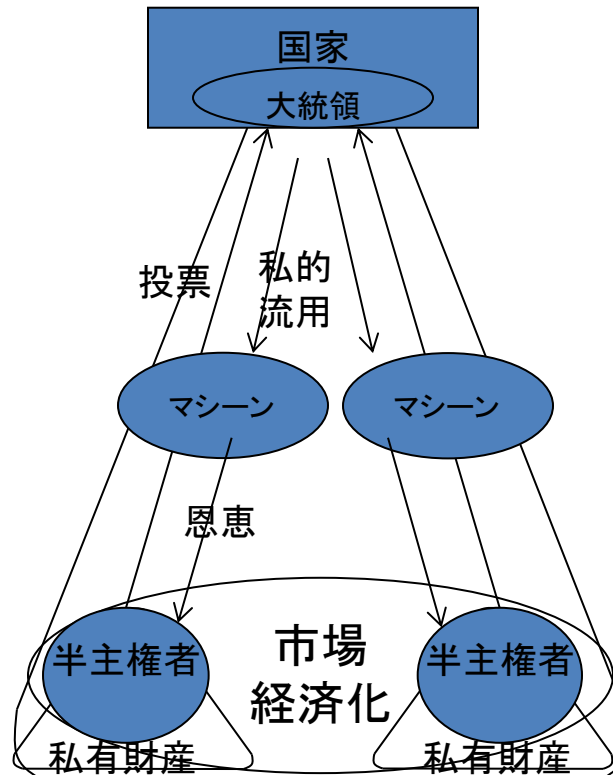
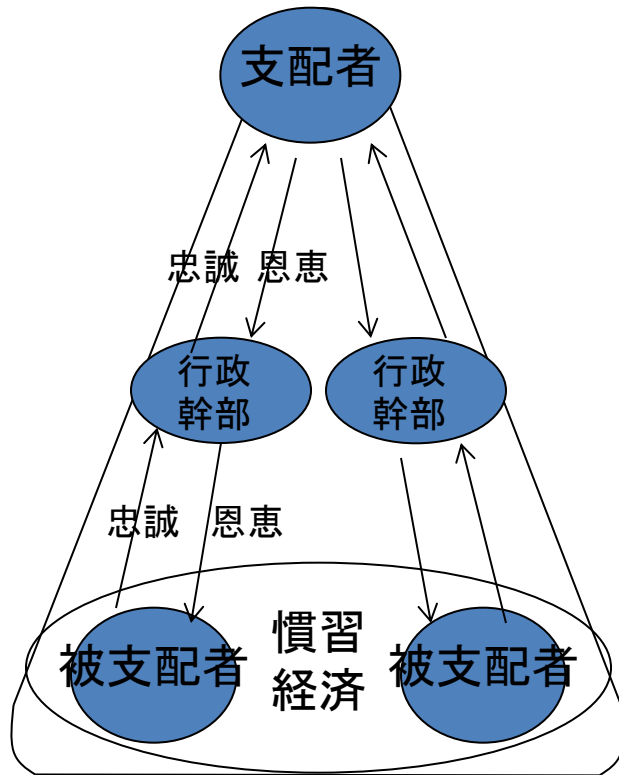
- 特異な条件が存在しない場合にどうするか
(下村報告)
- アジアドナーとしての経験の活用と対外発信
の必要性(下村報告、大野報告)
- 民主主義のもとでの開発(大野報告)
- 対話型の実践と「モデル」志向はどう折り合い
をつけるのか？

研究課題

- 「段階論/類型論は有効か、重要か、なしうるか？」(柳原報告)
- 「適応」については、キャパシティ・デベロップメントの議論とどのように繋がりうるか？
- プロジェクトの効果の持続性と、その後の開発政策へのインパクトについての検証(下村報告)
- 「(新)家産国家」についての位置づけ。「ルートネス・ネス」。循環論(高橋報告)

分野間の連関と発展段階

<家産制> —————> <半家産制> —————> <近代国家>



家産制の機能に基づく分類

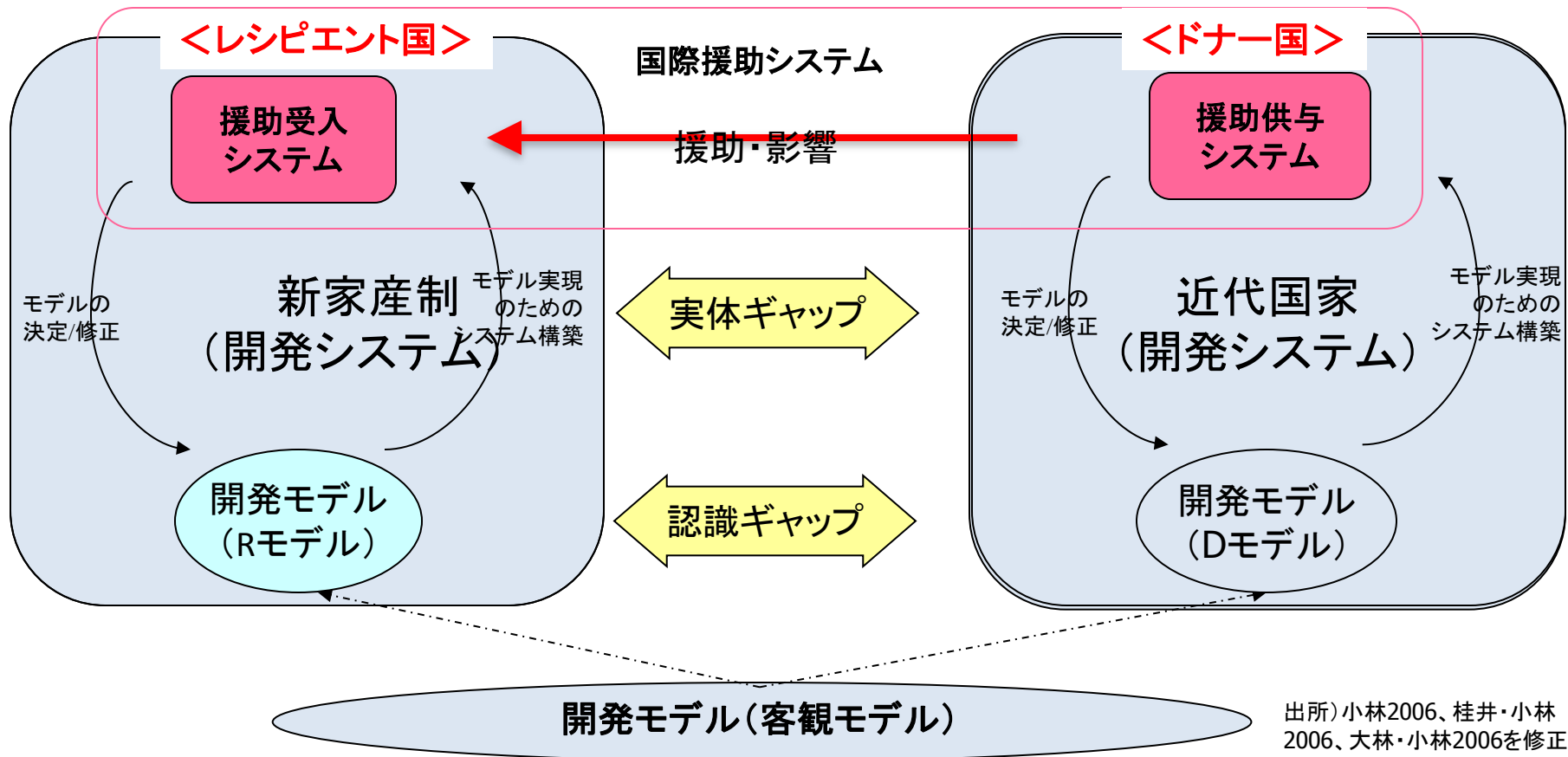
機能 比較	家産制	近代国家
	特徴	
意思決定権の所在 ＜政治(社会)学＞	個人 (独裁制)	社会の構成員 (民主制)
統治手段 ＜行政学・社会学＞	忠誠と恩恵の交換 関係に基づく 行政幹部	法で定められた義務 関係に基づく 官僚機構
資源の所有形態 ＜財政(社会)学＞	個人による私的 所有(家産)	社会による公的 所有(公共財)

石川の家産制の議論について 政治学者としての立場からの討論者の見解

開発モデルを規定する政治メカニズムがブラックボックスとして扱われてきたなかで、そこに切り込んだ石川の試みは重要である。しかし、近代が備えた特質を欠いた制度を全て「(新)家産制」という概念で理解することは避けなければならない。

途上国ごとの固有の開発モデルが機能しないのはなぜか？

→ 特殊開発モデルの必要性



最後に

「ベトナムでの反省としては、石川プロジェクトという知的支援のモダリティに対して、円借款など何をやったかということと突き合わせる作業。開発モデルに関連するエクササイズと知的貢献とが、援助を媒介にしてどのように繋がったかを検証する必要がある。」

石川滋(2006年4月6日)電話インタビューにて